

# ぶらす

出居清太郎ワールドへのご招待

No.110  
2020・春

自分の心を見直す

(1) 「言うことを聞かない」のは

子どもに教えてあげる母親に、しつと心がある、怒りがある、子どもの行いに不満がある。そういう心で子どもに言葉を差しあげても、あげた言葉がムダになります。これを「言うことを聞かない」という。

私たちは毎日のように経験しております。「なぜこの人は言うことを聞かないのだろう」「なぜわからないのだろう」と。

それは、自分自身に、聞かないところが

あるからであります。自分自身に知識の足りないところ、徳の足りないところ、不満の浄化できないところがある。それを教えてくださっていることに気がつかない。

(出居清太郎先生の言葉から)

母親に、子どもに対するしつと心があるとは意外です。母親に聞いても、それはなにと答えるでしょう。しかし、子どもの元気さ、無邪気さ、成長する力などを見る時、

気づかないままに、しつと心を持っているとしても不思議ではありません。その心から出ることは、子どもの心に入っていないのでしよう。

また、怒りや不満の心で発せられたことばも通じないでしよう。

母親たちはよく、「子どもの為を思っている」と言いますが、子どもの為と言いながら実は、自分の見栄の為だったり、自分が楽をしたい為だったりすることが往々にしてあるのではないでしようか。それを子どもは敏感に感じ取って、「言うことをきかない」のかも知れません。

子どもが「言うことをきかない」とき、自分中心の心や、不満、怒り、しつとといったよこしまな心がないかどうかを見直すことは、大いに意味のあることだろうと

思われます。

大人同士の間でも、上司と部下、夫と妻、親と子など、お互いに「相手が言うことを聞いてくれない」と思っています。

相手が言うことを聞いてくれない時、不満と怒りで過ごすのと、自分に足りないものは何かと反省するのでは、その後の人生の展開が大いに違って来るでしよう。



カット 大西 恵

(2) 当たり前前のものも有難い

物をいただくとは有難がるが、光や熱や水や空気をいただいている有難さに気づかぬ人が多い。

体内に寸暇なく働く器官に対して、夜寝る前に「ご苦労さま」と心からなる感謝を捧げ、なでさすりつつ労をねぎらいながら眠りにつく人は、後始末のできた人で、底のある人である。かかる人は、健康という徳がたくわえられていくのである。

人は目に見えた周囲の人の勤労だけでは感謝を捧げますが、大海に船を乗り出して魚を捕ってくる人たちの苦心に対しては無関心であります。すべて万事一切、目

に見えない業に対しても、陰から感謝できるようにになれば、心身のわずらいや、どうにもならないような悩み苦しみはないはずであります。万事に感謝の誠を捧げ、日々を過ごしていけるように心がけるべきであります。

奇跡としか思われぬようなこと、一生忘れられぬような喜びだけに感謝を捧げるのではなく、平常、普通に暮らさせていただいていることに、ああ有難いとの心がしみじみと持ち続けられねばならない。

(出居清太郎先生の言葉から)

自分に直接、恩恵を与えてくれた人には、誰でも「有難う」と感謝します。また私たちの生活が多くの人たちの働きによって

成り立っていることは事実ですから、その人たちに感謝の気持ちを持つこともできません。

さらに体内の器官についても、それが精妙な働きをしていてくれることを、私たちは知っていますので、有難いと思えます。

ところが光や熱、水や空気に対してはどうかでしょう。これらは、その存在は当たり前であって、「有り」「難い」ものではなく、したがってそこでは、感謝の気持ちは表われにくいですが、その圧倒的な存在を思えば、畏敬の念が生じるのではないでしょうか。そしてそれは、高慢な心を反省し、謙虚な心を持つことにつながります。

さらにその謙虚な心は、平常の当たり前生活を、また当たり前として見過ごしてきた、まわりの人々の対応を「有難い」と感じることにつながるのではないのでしょうか。

### 編集後記

平和の祭典 東京オリンピックの年ですが、国の内外、問題山積です。そこへもってきて新型肺炎騒動です。いやはや。それでも四季はめぐり、梅、桃の香りを楽しめる時となりました。

次号は10月1日発行です。(H・Y)

令和2年3月1日発行 ふゆのあり723号付録

ふらす α 令和2年春号(通巻110号)

編集人 山本博也

発行所 〒170-0011 東京都豊島区池袋本町3-11-1 修養団捧誠会 青少年委員会 TEL03-3397-11493